

# 八幡岬コース

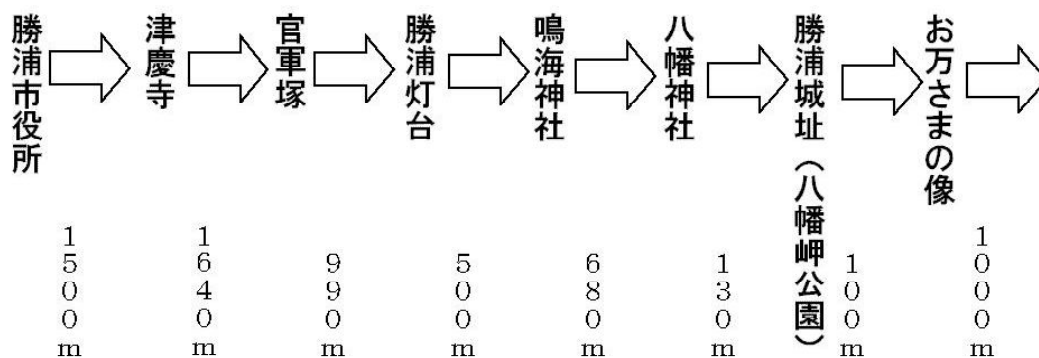
千葉県で唯一の佛足石（津慶寺）を見、戊辰戦争ゆかりの官軍塚、その高さ50m以上という断崖で「お万の布ざらし」の伝承がある八幡岬などをめぐるコースです。

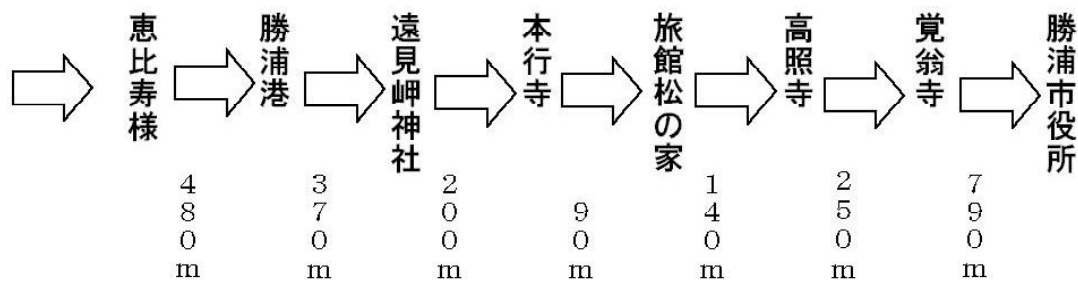
## 経路図



スタートとゴール地点は駐車場のある勝浦市役所です。

## コースの経路(8.9km)





## 【経路の説明】

市役所に車を置き、武道館研修センター脇の坂道を下る。沢倉区集会所がある丁字路を左折し、左右に切り通しがある道を行くと、観音寺に出る。このころには海が見える。太平洋である。観音寺のところを右折する。海沿いに進むと川津漁港に出る。川津漁港の中心近くに①津慶寺がある。

※ここには県下で唯一の佛足石がある。

もとの道に出て、港沿いを進み、万名第二トンネル、更に万名第一トンネルを通り、坂道を上る。突き当たりを左折すると駐車場や展望台が見えてくる。県指定史跡②官軍塚である。この展望台からは雄大な太平洋のリアス式海岸を一望できる。引き返して山道を1kmほど進むと③勝浦灯台がある。左下に海を見ながら500mほど行くと④鳴海神社に出る。

※かつて植村土佐守の住まいがあった地である。

この神社の少し先を下ると与謝野晶子の⑤「上総の勝浦」の歌碑がある。また、坂道をもときた方に上り、右折して進む。猿山トンネルを過ぎると駐車場に出る。更に道なりに行くと八幡神社の鳥居がある。この階段を上ると正木氏や植村氏代々の崇敬浅からずという⑥八幡神社がある。鳥居を出て進むと⑦八幡岬公園である。ここは勝浦城址で勝浦城の曲輪があったとされている。公園の奥にある階段を進むと岬の展望台に出る。この展望台に近くに⑧お万さまの像がある。また、⑨砲台跡でもある。

※太平洋が一望できる絶景ポイントである。

元来た道を引き返し、猿山トンネルを過ぎた Y 字路を左折し、坂道を下ると虫浦トンネルに出る。このトンネルを出た後、右側の民家の脇にある小さな坂道を上ると⑩恵比寿様がある。左に進む。勝浦魚港が見える。⑪勝浦漁港の魚市場がある。右折し、広い通りを更に右折すると浜勝浦橋がある。橋を渡ってすぐ右折する。まもなく変則十字路に出る。そこを直進すると本朝寺、安立寺がある。左に京葉銀行がある。そこを右折し階段を上って行くと⑫遠見岬神社である。遠見岬神社の先隣が⑬本行寺である。本行寺の門を出、直進すると商店街にでる。そこを右折すると右手に⑭松の屋旅館(国登録有形文化財)がある。その先の細い路地を左折すると乳公孫樹で有名な⑮高照寺がある。もとの商店街の出て、左折すると信号機のある交差点にでる。この先に市立図書館があるが、交差点のすぐ先に⑯覚翁寺がある。覚翁寺を出て、左折する。かつて勝浦で最も賑わったという岩切通りであるが、今はその面影はない。間もなく沢倉区集会所が見える。そこを左折し、坂道を上ると市役所に出る。

# コースの見所

## ① 津慶寺 (しんけいじ)

### 佛足石 (ぶつそくせき) 市指定有形文化財

津慶寺本堂前西側の小堂内に埋設されている不整形な粘板岩の表面、研磨部分に刻まれている岩は、幅約2.3m、奥行き約1.1m、地上高約45cmで、足洗いを向こうにして一対である。

佛足は深さ1cmの足型輪郭内に千輻輪せんぷくりんその他の文様を陽出する。足型は縦48.5cm、両足間の間隔23.5cm、佛足石を前にして堂奥に碑石が建てられており、表面に「観佛三昧海経」「西域記」などに依拠する刻文を陰刻し、碑背には天保二年(1831年)当寺三十世、日霽(にってん)が建てた由來を記している。



川津地区は近世初期、紀州漁民の移住者が集住したといわれ、本佛足石もこれら移住漁民の手によって運ばれたものとみられる。県下では唯一のものである。

※佛足石:釈迦の足跡を石に刻み、信仰の対象としたもの。古代インドでは像を造る習慣がなかったため、このような佛足石や菩提樹などを用いて、釈迦やブツダを表現したとされている。日本には奈良時代に唐を経て伝わり、日本各地に存在している。(奈良薬師寺にあるものが有名である。)

### 津慶寺

正応三年(1290年)真言律師日文が、日持上人との法論に破れ、日蓮宗に改宗するにいたったとされる。この津慶寺には、函館五稜郭制圧に向かう途中川津沖で遭難した肥後藩士の過去帳があり、境内には難破した艦から引き上げた揚錨機や遭難の碑がある。夷隅風土記

## ② 官軍塚 (かంగんづか) 県指定史跡

慶応四年(1868年)一月から明治二年(1869年)五月にかけて倒幕派と旧幕府軍との間で戦われた戊辰ぼしんの役は、幕末維新の過渡期に明確な一線を画した戦役である。

この役で、旧幕府の海軍副総督、榎本武揚たけあきは、北海道函館ごりょうかくの五稜郭に拠って官軍に抵抗し、維新政府から鎮圧を命ぜられた津軽藩も容易に平定できなかった。そこで津軽藩の実兄が熊本藩主であった縁故を頼り、肥後藩に援軍を要請した。明治二年正月二日、援軍は米国汽船を雇って隊長寺尾九郎右衛門の指揮する肥後十二番大隊、重士隊、大砲隊、五番隊、十四番隊など三百五十人が乗船、北海道に向かった。しかし、三日夜勝浦川津沖の岩礁地で大暴風雨に遭い難破する。

川津住人挙げての救助活動であったが、自然の猛威は凄まじく二百名を超える犠牲者が出た。この犠牲者を埋葬し、供養したのが官軍塚である。



県指定史跡 官軍塚

### 【句碑】（官軍塚）

中村汀女<sup>ていじよ</sup> 「香焚けば 情こまやかや 春の海」

※中村汀女(1900～1988):俳人。熊本県生まれ。本名は破魔子。1918年熊本県立高等女学校補習科卒。大蔵官僚・中村重喜氏と結婚、夫の転勤とともに国内各地を転々とする(東京、仙台、名古屋など)。1934年「ホトギス」同人となり、日常生活を柔軟な詩情を込めて表現した。句集「春雪」「花影」などがある。1947年俳誌「風花」を創刊。

この句は熊本出身の中村汀女が五稜郭に向かう途中で遭難した同郷の肥後藩士を偲び詠んだものである。

また、この官軍塚には、斎藤<sup>もきち</sup>茂吉の海辺「ひく山は 重なりあひて おのづから 小さき港と 成りゐたりける」の歌碑もある。

### ③ 勝浦灯台

大正6年(1917年)2月、海拔71mの「ひらめヶ丘」に建設された白亜八角形の中型灯台。灯高は21m。光達距離は22海里(約41km)、光度は14万燭光。丘から見る日の出は圧巻である。



灯台入り口の反対側に

富安風生の句碑「鶯や 礁へ落とす 萱の徑」がある。  
(いくり) (かや) (みち)

#### ④ 鳴海神社 (なるかじんじゃ)

天正十八年(1590年)、小田原城開城と北条氏の滅亡。徳川家康が関東入国(同年八月)。上総大多喜に本多忠勝が、勝浦には忠勝の与力「植村泰忠<sup>やすただ</sup>」が配置された。(勝浦城主正木頼忠は勝浦城から退去した。)その植村泰忠が建立したとされるのが鳴海神社である。



※ここが城内最高所で、勝浦湾を広く見渡すことができる。また、まとまった城郭遺構が残されている。

泰忠(やすただ)の供養塔がこの神社手前の新地ヶ台にあったと伝えられ、ここに居を構えたと考えられている。

※供養塔は「法印様御廟<sup>ほういんさまごびょう</sup>」と呼ばれ、昭和二十年代に勝浦市出水の覚翁寺に移転。

勝浦湾を一望するこの地から、正木氏や植村氏の変遷に思いを馳せてはいかがでしょう。

#### ⑤ 与謝野晶子の詩碑



##### 与謝野晶子の詩碑(上総の勝浦)

歌人の与謝野晶子(1878~1942年)は大正八年(1919年)ごろに勝浦を訪れており、「上総の勝浦」という詩作を残している。この詩碑は鳴海神社の手前(一段下の平地)にあり、勝浦湾を一望できる場所に建てられている。

※書家白汀<sup>きごう</sup>の揮毫で「おお美しい勝浦 山が緑の 優しい両手を伸ばした中に 海と街を抱いている…」と続く。

また、与謝野晶子は昭和十一年(1936年)四月に作家有島生馬(有島武郎の弟)らとともに来て「一山荘」に泊まり、このとき七十六首の歌を詠んでいる。

※一山荘:川崎軍治氏の別荘

「松山と 入江の青に浸りたる 勝場<sup>かつば</sup>の浦の 一もとざくら」など。

これらの歌は鶴原理想郷の道標に刻まれている。

#### ⑥ 八幡神社

祭神は誉田別命(ほんだわけのみこと)。治承年間(1160~1180年)の伝承あり。

※誉田別命:応神天皇のこと。第15代天皇(在位270~310年)。八幡神は武家の守護神として知られる。

当初の勝浦城は字郭内つまり八幡岬にほぼ限定されたと思われるが、その中核部分に位置したのがこの八幡神社であった。正木・植村・大岡と江戸時代まで各領主の崇敬は厚く、

当時雨乞い潮祭り等は、全てこの八幡神社で行われたという。夷隅風土記

八幡神社の入口には勝浦城址の石碑があり、鳥居をくぐり階段を上るとその最も高いところに八幡神社はある。訪れる人も少なくなった今、当時の勝浦城の中核部分であったこの八幡神社に思いを馳せてはいかがでしょうか。



## ⑦ 八幡岬公園

八幡神社の先で、現在公園として整備されている八幡岬公園は勝浦城の曲輪くるわであった。

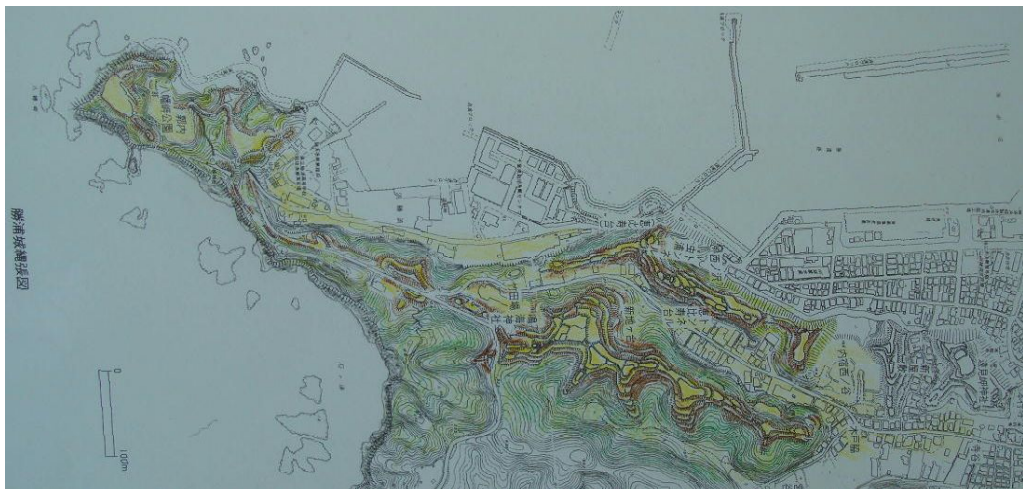
※曲輪：城郭の核となる部分で本丸などとも言われた。

勝浦城は当初武田氏ないしその一党がいたという説もあるが、確実なのは正木氏以後で、天文十一年（1542年）の資料がある。天文七年（1538年）の国府台合戦によって上総武田氏は弱体化し、その領国は北条氏と里見氏の蚕食さんしょくするところとなる。安房において里見氏に次ぐ実力者であった正木氏が、小田喜（正木時茂）、勝浦（正木時忠：時茂の弟）と分割し入部した。天文十一年ころであろう。天正三、四年（1575、1576年）時忠親子が没し、正木頼忠よりただが相続。秀吉による上総没収まで居城した。

以後植村泰忠が入部し居城としたが、二代植村泰勝は串浜新田に陣屋を作り、移ってゆく。



## 勝浦城址



勝浦城の遺構は三ブロックに分けられる。一つはこの八幡岬。他は鳴海神社周辺とその下の恵比寿地区である。城の性格は、勝浦港を押さえる「港（海）城」とすると共に、勝

浦正木氏の領国支配の拠点でもあった。海中に屹立する半島とその背後を取り込んだ構造はその性格と成長の反映であると考えられる。中世の湊とそれに依拠する領主の居城について、多くのことを物語っていると見えよう。

## ⑧ お万の像

お万の方：養珠院（1580～1653年）。勝浦城主であった正木頼忠の娘。後に徳川家康の側室となり、徳川頼宣（紀州徳川）と徳川頼房（水戸徳川）を生む。

※水戸黄門はお万の孫にあたる。

八幡岬の先端は勝浦城の物見台があったとされる。その位置にある展望台に太平洋を見下ろすように「お万の像」が建っている。

### お万布ざらし 伝承

この八幡岬の先端に近い断崖の松の根方に「お万の布ざらし」という名所がある。天正十八年（1590年）お万が十三才になったころ、徳川家康が関東一帯を支配するようになり、それにつれて勝浦城主の正木頼忠も家康の家臣に攻められて城を追われることとなる。伝承では旧暦の八月十五日（現在の九月十五日）、満月が雲にかくれ、草むらに虫の声も聞こえなくなったような夜の闇にまぎれて、お万は母に手をひかれ、父や兄たちとの別れの涙に濡れながら、こっそりと城をぬけてた。岬の先端の松の根方に、用意しておいた白布を滝のようにさらし、それを伝わりながら、海まで下りてゆき、小舟で伊豆方面に逃げ延びたと言われている。

この絶景の八幡岬の展望台から見下ろす真珠のような海を眺め、お万の布ざらしの伝承に思いを馳せてみてはいかがでしょう。



## ⑨ 砲台跡

お万の像のある八幡岬の先端の高台は、江戸時代末期、岩槻藩の異国船防御のための砲台が置かれていた。

※岩槻藩：1751年10月勝浦藩植村氏は植村恒朝一族の過ちから領地没収となる。同年12月徳川家重の側近として活躍していた大岡忠光が大名となり勝浦に藩庁を置く。

1756年忠光は側用人になり、武蔵国岩槻藩主となる。（勝浦には岩槻藩の勝浦役所が置かれる。）

江戸時代は日本近海に度々異国船が遭難したり来航したりし、海防が大きな課題であった。文政八年（1825年）異国船打払い令が發布されると岩槻藩勝浦領でも、砲台の建設に着手した。

古老の話では、一回だけ試射したが、三百数十mしか飛ばなかったという。夷隅風土記



## ⑩ 恵比寿様 (えびす)



<sup>むしうら</sup>  
虫浦隧道の浜勝浦側出口の上に、忘れられたように存在している。西宮神社で、地元では一般に恵比寿様と称している。西宮恵比寿神を祭った社である。この西宮恵比寿神は商売の神として信仰を集め、「はまの市」の主神であった。つまり、西宮恵比寿神は、市場のあるところに祀られていた市神である。

※恵比寿様：平安時代の後期には、恵比寿を市場の神として祀ったといわれ、鎌倉時代にも、鶴岡八幡宮内に市神として、恵比寿を祀ったという。このため、中世に商業が発展してくるにつれ、商売繁盛の神としての性格も現れてくる。

この西宮神社は久我将監<sup>しょうげん</sup>が氏神を祭祀したことに始まったとされる。この将監は当時浜勝浦村の経済を事実上牛耳っていた久我家当主政則を指すといい、勝浦朝市との関連があったと思われる。

## ⑪ 勝浦漁港

第3種漁港（その利用範囲が全国的なもの）。

この漁港は、房総半島南部の勝浦市中央部の勝浦湾奥に位置し、漁業上重要な役割を果たしている。

また、南房総国定公園の指定区域内にあり、海岸線は岩礁、砂浜と変化に富み風光明媚な地域でもある。

水揚げ高は銚子について千葉県内第2位を誇る沿岸・遠洋漁業基地。カツオ、マグロ、鯛、鯖、イカのほか、アワビ、サザエ、伊勢エビなど四季折々の海の幸が豊富である。中でも、カツオの水揚げは日本有数であり、1990年には水揚げ高日本一を記録している。

※「勝浦のカツオ」としてブランド化している。

この勝浦漁港では、六月の第一土曜日に勝浦港「カツオまつり」が開催されて、大勢の観光客が訪れ、盛況である。

また、この漁港区域内には千葉県で最初の栽培漁業センターがあり、水産業の発展に寄与している。



## ⑫ 遠見岬神社 (とみさきじんじや)

祭神は房総半島を開拓した天富命 (あめのとみのみこと)。

※天富命:房総開拓の祖。太玉命ふとだまのみことの孫天富命が、天日鷲命あめのひわしのみことの孫由布津主命ゆふつぬしのみことを率いて、阿波の国(徳島県)、更に総の国(千葉県)を開拓したとされる。古語拾遺

天文四年(1535年)八月、本社ほんしやの造営が成就している。この遠見岬神社は「里見正木及び近郷の領主の信仰篤かりき」と言われている(夷隅郡史)。

もとは「富大明神とみだいみょうじん」と称した。慶長六年(1601年)の津波で流されるまでは、八幡岬突端の富貴島ふきしまに所在していた。万治二年(1659年)に現在地に建立された。今の社殿は嘉永二年(1849年)に造営された。神社の向拝彫刻は嶋村道友の作。波に龍の神鏡台みこしと御輿たけしのぶあきの彫刻は四代目武志信明の作である。(神輿は市役所ロビーで展示公開。)

高台にあり、勝浦市街や勝浦湾を一望でき、その眺めは素晴らしい。

春の「かつうらビッグひな祭り」ではこの遠見岬神社の六十段の石段一面におよそ1,200体のひな人形が飾られ、夕刻からはライトアップされる。



## 忌部 (いんべ) と遠見岬神社

忌部けがとは「穢れを忌み嫌い、神聖な仕事に従事する集団」の意味を持つ。

今から1700年前、吉野川流域を開拓した天富命と阿波忌部の一部は、吉野川を出発し紀伊水道から黒潮ルートに乗って房総半島に到着し、関東一円を開拓したと言われている。

遠見岬神社の縁起には、「この社の祭神、天富命、神武の御代勅命を奉じて四国の忌部族を率いて、安房の洲崎に渡り、陸路上野村に至り、同村細殿ほそどに居を下し、度々勝浦の間を往復す。やがて漁にたくみなる紀州忌部をまねきて、土民に漁を教ふ」とある。

阿波忌部には、他に麻植(おえ)忌部、御木忌部、勝占忌部、阿良香忌部あらかなどがあり、房総に来ては、安房の地に阿波忌部が主に住し、勝浦には、勝占忌部が中心となったとされている。

※この勝占の名が「勝浦」の地名の由来であるとの説がある。また、旧上野村には、忌部に因む「御木、名木、荒香(荒川)」の字名がある。

勝浦の由来では、「桂浦」「葛浦」説もある。これは、紀伊勝浦・土佐桂との関係に由来するものと、天然の良港すなわち勝れた浦の意に由来するものなどがある。

また、現在の墨名区の氏神、熊野神社は紀州の熊野神社の末社であり、その他、この地方に熊野神社の分身が多いのも、忌部族の開拓、移住につながるものであろう。矢代嘉春著「鳴海の海」

### ⑬ 本行寺 (ほんぎょうじ) (釈迦堂)

暦応二年(1339年)日統によって、真言宗から日蓮宗に改められたと伝えられる。享保八年(1723年)の五十座に際し、池上本門寺より、日蓮聖人の御歯骨を分与された。写真は市有形文化財の釈迦堂である。千葉県でも、重層建築の釈迦堂は希である。日蓮聖人の御歯骨を奉安するため建てたところから舍利塔しやりとうの意も含んで重層にしたものであろう。

亀腹基壇かめばらきだんに立ち、三間堂で重層方形造り、棧瓦葺きさんがわらで棟上げに擬宝珠ぎぼしをのせている。構造柱は円柱、周辺に和様高欄わやまかかんを設けている。中央奥に須弥壇しゅみだんがあって、釈迦如来が祀られているが、その前室内中央に厨子ずしが設けられ、御分骨が奉安されている。天井は鏡板に彩色にて橘たちばなの紋を描いた格天井であり、よく整った建物とってよい。

建造年代は寛政五年(1793年)で、大工棟梁として「当町 渡辺久七 渡辺弥左衛門」で、古い伝統をもつこの地方の大工棟梁が、優秀な技法をもっていた例証として貴重な建造物である。

境内には松尾芭蕉の句碑「御命講おめいこや あぶらのやうな 酒五升」がある。



### ⑭ 旅館松の家 (まつのや)

創業は古く江戸末期にさかのぼる。本館の建物は昭和十年(1935年)に建てられたもので、正面玄関の唐破風や手すり、内装など昭和初期の面影を残している。

本館は平成十五年国登録有形文化財として登録された。

明治・大正期、避暑地・海水浴場としてにぎわった勝浦は勝浦館こうぜんろう、幸前樓、山本樓、松の家、高砂館、清水館、寶來館、大盛館、竹屋、東屋、新角などの旅館ほづらいがあった。この松の家は当時の様子を今に伝えている。

※唐破風からばふ:破風は、切妻や入母屋などにできる、妻側の三角形部分の造形。唐破風は、日本独特の形式で、切妻のむくり屋根の先に独特のフォルムの破風板が付けられる。城郭建築や近世の寺院などで多く見られ、装飾性がある。(唐破風の中でも「軒唐破風」と言われる形式である。)



### ⑮ 高照寺 (こうしょうじ)

日蓮宗。開基は日実。創建は文明十二年（1480年）。



### 乳公孫樹 (ちちいちょう) 県指定天然記念物

本樹は、高照寺東側境内墓地にあつて大きな乳柱が多く発生しているため乳イチョウと言われている。百年ほど前の勝浦火災で主幹の上部が枯損し、樹高は10m余り。樹冠は大きく広がり、海風のためホーキ状になっている。大小合わせて百以上の乳房が垂れ下がっている。樹齢は不明だが牧野富太郎理学博士が訪れた際に「千年の年輪を数えるか」と言わしめた。

寺伝に、「千余年の昔 一聖僧この地で法華経読誦により里人の乳不足で悩める婦人を治し乳飲み子の成長を容易にしたという。僧の死後里人、徳を偲び墓上にイチョウ一樹を植えたところ、成長するにつれて乳柱を生じて乳汁不足の者は来たり詣で、これを治すに効能顕著なり」とある。

### ⑯ 覚翁寺 (かくおうじ)

寛永十一年（1634年）勝浦城主二代植村泰勝<sup>やすかつ</sup>が死去した時、城内にあつた浄林寺を勝浦市出水に移し、泰勝の幼名覚翁丸をとって覚翁寺と改称した。爾来植村家歴代の菩提寺として百六十年間尊宗を受けている。本尊は阿弥陀如来三尊立像を安置し、慈覚大師の作と伝えられている。



## 覚翁寺本堂正面左右欄間 市指定有形文化財

初代武志伊八郎信由(俗称波の伊八) 作の欄間彫刻が本堂正面結界部分左右両端に掲額されており左右両面とも表裏両面彫りである。初代伊八作品の中で両面彫りは少ない。行元寺(いすみ市) の有名な波の欄間作品の原点ではないかと言われている。文化二年(1805年)、伊八52歳の油の乗り切った作である。

## 植村土佐守泰忠定書 (さだめがき) 市指定有形文化財

根古屋市場開設に関する定書。地元城下町に市場を開設、運上金の収入増なども考慮した領主経済の在り方も伺える近世初期の流通経済の一面を語る資料である。

※ 植村泰忠が勝浦の市を統制するために発給したもの。書かれた年代は天正十九年(1591年)だと考えられている。

## 『朝市』 ～400余年の歴史 今も変わらずに～

一遠見岬神社…高照寺一は勝浦朝市通りである。

勝浦の朝市の起源は上記の天正年代だと考えられている。江戸時代の享保期は月の六日開催であったが、明治十年代には、現在と同様の毎日開かれるようになっていた。

採れたての野菜や果物、その日の朝漁港で水揚げされたばかりの魚介類、自家製の漬物、塩から・なまり節や干物などの加工品、竹細工・木工細工・わら細工などの工芸品等が店先に並び、活気とにぎわいを見せている。



## 植村家宝篋印塔 市指定有形文化財

植村泰忠は、天正十八年(1590年) 徳川家康より三千石を賜り勝浦城主に封じられた。泰勝・泰朝・忠朝・正朝と継ぎ領地一万石を受領して百六十余年(1590～1751年)にわたり勝浦に善政を行った。

覚翁寺は植村氏の菩提寺で、境内には植村氏五代の墓塔がある。

一基は初代泰忠の墓塔で・善福院殿二位法印轉心不覺居士 慶長十六年一月十九日七十三歳卒上総之國勝浦当城主植村土佐守源朝臣泰忠とある。

※法印様御廟と言われていた。昭和二十年代に勝浦城址から移された。

もう一基は 浄林院殿覚翁大居士 蓮華浮彫(左右面にある) ※二代泰勝の墓塔

ほかに三基ある。江戸時代の前期から中期のもので石造美術として優秀な作である。



※宝篋印塔(ほうきょういんとう)

ようじゅいん  
養珠院お万の方

- 勝浦市の歴史に関する著名な人物として、養珠院お万の方がいる。※以後養珠院とする。
- (天正元年・1573年 兄のためはる為春が小田原で誕生する。後の紀州徳川家家老三浦為春)
- (天正三年・1575年頃 父正木頼忠、勝浦に帰還する。)
- (天正四年八月・6年 頼忠の父時忠死去。頼忠が勝浦城主になる。)
- ・天正五年(1577年)四月 正木頼忠を父として誕生する。
  - ・天正八年(1580年) 大多喜の正木憲時による挙兵によって勝浦城から三原(和田町)に移り、その後、母・北条氏に連れられて小田原に居を移す。
  - ・天正十二年(1584年) 母親が蔭山氏と再婚したことにより、蔭山氏の一族となる。
  - ・天正十八年(1590年) 秀吉の小田原攻めによってさらに居を移す。
- (天正十八年八月 徳川家臣植村泰忠、勝浦入部する。)
- ※ 正木頼忠の勝浦落城が「お万布晒し」の伝説を生む。しかし、養珠院はこの時点では勝浦に居住していなかったと言われている。
- ・文禄二年(1593年) 三島(静岡県)で徳川家康に江川太郎左衛門の養女として目見え、家康の側室となる。
  - ・慶長七年(1602年)三月七日 京都伏見城で家康の第10子頼宣よりのぶ(後の紀州徳川家の祖)を生む。※頼宣の孫には、八代将軍徳川吉宗がいる。
  - ・慶長八年(1603年)八月十日 京都伏見城で頼房よりふさ(後の水戸徳川家の祖)を生む。  
※水戸光圀みつくに公は頼房の子で、養珠院の孫である。
  - ・慶長十三年(1608年)江戸城新丸で浄土宗と法華宗が対峙し、その関係で身延山二二世心性院日遠が磔刑に処されそうになった。養珠院は日遠を身を挺して救ったという。
- ※慶長の法難
- ・元和二年(1616年)四月十七日 徳川家康が没する。二十日髪を落とし、養珠院と号す。
  - ・寛永十七年(1640年) 女人禁制であった身延の七面山に初登詣する。
- (元和八年八月十九日・1622年 父正木頼忠、和歌山藩の為春のもとで死去する。)
- (承応元年・1652年 兄三浦為春死去。三浦家は和歌山藩においてその重役と長門守の受領名を世襲し、一万五千石と大名並の所領高を有した。)
- ・承応二年(1653年)八月二十二日 紀伊家江戸屋敷にて養珠院没する。



養珠院肖像画(静岡県龍華寺蔵)  
狩野探幽画

